SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

動物のまなざしの下で：ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』再読

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会 公開日: 2022-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028827

動物のまなざしの下で
―ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』再読―

安　永　　愛

はじめに

2019年12月３日、チェコスロヴァキア出身の亡命在仏作家ミラン・クンデラが、共産党政権下で剥奪されていた国籍を40年ぶりに回復したとの報道が世界を駆け巡った[1]。チェコの駐フランス大使が、1929年生まれで齢90歳のクンデラのパリの自宅に書面を届け、クンデラの文学作品がチェコの名声を高めたとして謝意を述べた大使に、クンデラはヴェラ夫人と共に喜びの表情を浮かべたという。

クンデラの小説の読者なら、故国で著作が発禁とされチェコ語作品の読者を失う中、1975年にフランスに居を移し、作家活動を続けてきた彼が、故国に対しどれほど屈折した思いを持っていたかを知らない者はない。1975年以降のクンデラの著作は、まさに故国との距離の意識がベースとなって紡がれてきたと言っても過言ではない。40年ぶりのチェコ国籍の回復と、それを喜ぶ老いたクンデラに、流れた歳月、葛藤と和解・受容の長きにわたる作家の途方もない心理的プロセスを重ね、感慨を覚えないではいられないだろう。

さらに、2020年７月には、クンデラのパリのアパルトマンにある蔵書や草稿などを、全て生地であるチェコのブルノ市図書館に2020年秋に寄贈の予定であるとの報道もなされた[2]。クンデラの著作は、2014年に出版にされた『無意味の祝祭』[3]が最後となっている。2011年には、フランスの文学の殿堂というべきプ

---

[1] 2019年12月３日のル・モンドの記事など参照。
https://www.lemonde.fr/international/article/2019/12/03/la-republique-tcheque-a-rendu-sa-nationalite-a-milan-kundera_6021480_3210.html　チェコスロヴァキアは1918年から1992年まで存続。1993年にチェコとスロヴァキアに分離した。

[2] https://www.archimag.com/archives-patrimoine/2020/07/31/milan-kundera-legue-livres-archives-bibliotheque-brno

[3] Milan Kundera *La Fête de l'insignifiance*, Gallimard, 2014. フランス語バージョンに先立ってイタリア語の翻訳が上梓されている。邦訳は西永良成訳で、2015年に河出書房新社より刊行されている。

レイヤード叢書に、現存作家としては例外的なことであるが、クンデラの著作が収められていた。クンデラの作家人生が総括されたと了解されたのに続いて、いささか意表をつく形で『無意味の祝祭』が出版されたわけだが、蔵書と草稿を故郷に寄贈するクンデラに、ついに作家人生に真正の終止符を打つ時が来たのだと、読者としては粛然と受け止める他はない。

近年のクンデラにまつわる報道では、小説『存在の耐えられない軽さ』[4]を代表作として挙げるものが殆どである。「『存在の耐えられない軽さ』で知られる作家」というフレーズは、クンデラについてのセットフレーズになっている感すらある。1984年に上梓されたこの小説は、フィリップ・カウフマン監督によって1988年に映画化されたことも相俟って、世界的な反響を呼んだ。この作品の後も、『不滅』(1990年)『緩やかさ』(1995年)『本当の私』(1997年)『無知』(2000年）など、才気に富んだ小説作品、『裏切られた遺言」(1993年)『カーテン』(2005年)『出会い』(2009年）などの鋭利な批評作品が紡がれていったが、『存在の耐えられない軽さ』をクンデラの代表作であり、最高峰の作品であるとする評価には一定の妥当性があると考える。それは、この作品の発表から40年近い時間が流れ、その間に到来した数々の社会的経験・社会的危機の経験から改めて浮き彫りになってくることでもあるように思われる。

本稿では、『存在の耐えられない軽さ』出版から経た年月を踏まえながら、本作を再読し、ことに７章構成の本小説の「カレーニンの微笑」と題された終章の記述に着目しつつ論じていきたい。あらかじめ大枠を述べておくならば、この終章は、人間が動物の相、動物のまなざしの下に置かれていることがポイントである。「カレーニンの微笑」の「カレーニン」とは、主人公の夫妻の飼い犬の名である。

１.『存在の耐えられない軽さ』の執筆の萌芽から今日まで

『存在の耐えられない軽さ』は、1968年の「プラハの春」を一つの政治的背景として描かれた小説である。共産主義政権下にあったチェコスロヴァキアの民主化運動がソ連の率いるワルシャワ条約機構軍の侵攻によって制圧された一連の顛末を、「プラハの春」という提喩的表現で名指しているわけだが、小説の上梓された1984年当時、あるいは映画の公開された1988年当時の日本においては、政治的意識の希薄な大学生であっても、「プラハの春」という言葉が共産主義の

[4] Milan Kundera, *L'Instounable légèreté de l'être,* Gallimard, 1984.

帰結としての全体主義に抗する民主化運動とその挫折であるとする了解はあった。共産主義という制度の困難、米ソの二極対立の構造の下に世界情勢の安定がかかっているという認識、核による抑止力のもとでかろうじて保たれている世界的な均衡については、いくら好況に沸き「ジャパン・アズ・ナンバーワン」[5]などという脳天気な言葉が飛び交おうとも、何がしかの緊張感を持って意識しているのが平均的な日本の成人の日常感覚であった。資本主義対共産主義という図式がリアリティーを持っていた時代にあって、「プラハの春」を舞台とした小説・映画であることのインパクトは、ソ連が崩壊し東欧諸国も多くがEUに加盟し、むしろ米中の二極構造へと世界情勢の変化した現在と比べるなら、格段に大きかったと言わなければならない。

『存在の耐えられない軽さ』という小説は、自由と平等という近代的理念とその実現の方法における政治形態・社会形態の選択に関する葛藤を、政治学や社会学のレベルではなく、実に巧みに象徴的登場人物を配置し、その個人的な行動や日常の言葉に着目することによって描いていると捉えることができる。『存在の耐えられない軽さ』出版当時、東側諸国の日常についての情報は限られたものであったから、そうした共産主義政権下のチェコの生活の細部への読者の好奇心も、本作品の名声を高めるのに与っていると言えるだろう。

クンデラがこの小説の執筆に取り組んでいたのは、1979年ないし1980年から1982年にかけてのことであるが[6]、本小説の主人公トマーシュと、小説のライトモチーフであるドイツ語のことわざ「Einmal ist Keinmal」（ただの一度は意味をなさない）は、書き始める「25年以上も前から」温めてきたものであったという[7]。モチーフの懐胎から執筆へと至る25年までの間にクンデラは、詩人から小説家の転身（小説『冗談』を上梓した1967年ごろ）、小説という相対性の支配するジャンルへの確信の深まり、そして「プラハの春」批判によるチェコスロヴァキア共産党政権からの二度目の除名と著作の発禁処分（1970年）、フランスのレンヌ大学からの招聘を契機としたフランス移住（1975年）という事実上の亡命、チェコの市民権剥奪と自著の発禁処分（1979年）当時のミッテラン大統領の配慮によるフランス国籍の取得（1981年）といった経験を重ねていた。

---

[5] アメリカの社会学者エズラ・ヴォーゲルが1979年に上梓し、１ヶ月後に日本語訳も発売された、戦後の経済成長における日本的経営の有効性について論じた著作のタイトルである。ヴォーゲルの著作の原題は*Japan as Number One: Lessons for America*。

[6] Milan Kundera, *Œuvre I*, Bibliothèque de la Pléiade, 2011, Gallimard, p.1462.

[7] *Ibid.*

本小説はまずチェコ語で執筆されたが、チェコスロヴァキアでの出版は叶わず、トロントの出版社68Publishersから1985年にチェコ語版が出版された。自国での読者を失っていたクンデラはその後、多大な時間と労力を費やし『存在の耐えられない軽さ』のフランス語翻訳作業をフランソワ・ケレルと共に行い、フランス語バージョンを「チェコ語と同様の真正の価値を持つ」との但し書きとともに、フランスの老舗出版社ガリマール社より公刊した。クンデラは20世紀の歴史（とりわけ自由と平等という理念実現のための政治形態と合議のあり方、そして集団と個人の関係をめぐる葛藤）に翻弄された人生であり、翻弄されたからこそ世界の多くの読者の心を捉える作品を書いたとも言えるだろう。とはいえ『存在の耐えられない軽さ』の共産主義下のチェコスロヴァキアの描写自体のインパクトや、共産主義対資本主義といった観点は、世界における米ソ二極対立構造が失効し、共産主義的管理国家でありながら、莫大な富を得る富裕層の存在を生み出す新種の社会形態を実現している中国の存在感が世界において重きを成し、共産主義対資本主義という対立概念が時代錯誤的になってきた中では、いささか色褪せて映るのも偽らざる印象である。

２．東欧出身の亡命作家というレッテルを嫌ったクンデラ

チェコスロヴァキアの国籍を剥奪され、フランスに居を移し作家活動を続けることになったクンデラは、自らが「東欧出身の亡命作家」と見られることを嫌っていた。政治的なカテゴリーによって作品を読まれたり、共産主義政権下のチェコの生活のドキュメントのようなものとして受け止められたりすることにも、苦い思いを抱いていた。クンデラは自らの故国のチェコを、ハプスブルク家に由来するヨーロッパの正統たる「中欧」として捉え、共産主義国家としての「東欧」というカテゴリー分類は、浅い歴史しか持たない非本質的なものであると見做していた[8]。フランス移住後、クンデラの作品や発言の中で「中欧」概念、あるいは、「中欧」という限定さえ外した「ヨーロッパ」という理念が存在感を増していった[9]。自らをその伝統の嫡子として位置付け強い矜持をあらわにすることになっていく。その姿勢は、パリ移住後の小説作品にも評論にも一

8　ミラン・クンデラ「誘拐された西欧――あるいは中央ヨーロッパの悲劇」（“Un Occidant kidnappé ou la tragédie de l’Europe centrale” *Le débat,* 1983.）

9　初めてのフランス語による執筆小説である『不滅』以後のクンデラにおける「ヨーロッパ」概念の確立については、以下の拙論に記した。「ヨーロッパという寓話―ミラン・クンデラをめぐって」『AZUR』第３号（成城大学フランス文学研究会）69－83頁、2002年。

貫しているものである。

政治的カテゴリーよりも文化的カテゴリーを本質的なものと見做し、ヨーロッパ文化を代表する作家としての矜持を胸に、クンデラは亡命作家としての日日を生き抜いていったのではなかっただろうか。1989年に故国はビロード革命により民主化をすすめ、クンデラの国籍回復も提言され、母国への帰国の道が開かれても不思議ではない状況であった。しかし、クンデラはフランスに居を移してから十数年以上を経て、作家としての生活を確立していたのであったから、チェコに帰国することは、「もう一度亡命」することに等しいことであり、帰国は断固拒否していた[10]。

ビロード革命は、クンデラが故国を後にして14年後のことであった。民主化されたとはいえ、チェコに戻るという選択をクンデラは拒んだ。チェコ語の読者を失う中で、必死に地歩を築いたフランスで、作家として生きていくことをクンデラは選んだのである。共産主義の社会も資本主義の社会もどちらも知るからこそ書けることがあるとクンデラは確信していたと思われる。そして、「ヨーロッパ」という文化的遺産を受け継ぐものとして揺らぐまい、という確固とした意志が芽生えたと受け止められる。『存在の耐えられない軽さ』の次に発表された小説『不滅』は同時代のフランスが舞台となり、その次の作品『緩やかさ』はフランス十八世紀生まれの作家で『明日はない』の作者であるヴィヴィアン・ドゥノンへのオマージュとなった作品である。『存在の耐えられない軽さ』を最後に、クンデラの過去であるチェコが作品の中心に据えられることはなくなる。おそらくクンデラの作家人生の最後の作品になるであろう『無意味の祝祭』[11]においては、パリ中央の市民の憩いの場であるリュクサンブール公園が重要なトポスとなっている。登場人物たちもパリの住人たちであり、ことさらにフランス的であり、パリ的である舞台背景となっている。

リュクサンブール公園というトポスは、パリの中でもいかにもわかりやすいパリらしさの典型的なものとして選択されているように思われる[12]。作家とし

---

[10] Milan Kundera, *Œuvre II*, Gallimard, 2011, p.1196.

[11] 本作品が一連の自作品のパロディでありオマージュになっていることを詳細に分析した論文として、以下参照。ローベル柊子「ミラン・クンデラ『無意味の祝祭』における自己パロディと自己オマージュ」『フランス語フランス文学研究』114・115号（日本フランス語フランス文学会，2019年、35－49頁）

[12] パリの留学生仲間の間での「フランスの最もフランスらしいところ、パリの最もパリらしいところはどこか」という雑談で、リュクサンブール公園を挙げた人を何人か知っている。この公園はカルチエ・ラタンの南端にあり、周囲には、書店や文房具、手頃な価格の洋服や靴の店などが多い。リュクサンブール宮を背景に、美しい緑や花々、数々の彫像に囲まれ、平日昼間でもベンチに座ってのんびり陽を浴びている人々の寛ぎは、一つの文明の達成として感じられる。

て暮らしたフランス、そしてパリにオマージュを捧げるかのようでもある。クンデラ一流の茶目っ気ある作家としての退場のあり方に微笑を誘われる。感動的な大団円の後に、オマケのように少しばかりコミカルなシーンを挟んで幕を引くのがオペラの一つの型[13]であるが、クンデラの最後の小説（というより大人のためのおとぎ話といった風情の作品であるが）は、そのような軽さを纏っているのである。

このようにクンデラの作家人生を振り返るなら、『存在の耐えられない軽さ』という作品が、チェコのリアリティに根ざしていた時代からフランスのリアリティに根ざす執筆時代への分岐点であったことが、見て取れるであろう。

３.『存在の耐えられない軽さ』における20世紀の世界の象徴的人物造形

『存在の耐えられない軽さ』を上梓したクンデラは、この小説が亡命作家の描いた政治小説であると受け止められることを嫌い、これは「恋愛小説なのです」と語っていた。クンデラにとって小説とは、実存の実験室であり、実存をめぐる幾つかのキーワードの定義を追い求めていくこと、それを具体的な登場人物の行動やことばに託すことによって実現していくようなジャンルであり領野である。主人公が政治的な状況の中に投げ込まれているとしても、それ自体が小説の解き明かすところではなく、むしろ政治的背景は、主人公の実存のありようを映し出す一つの方便であり、一つの条件にすぎないものとして考えられている。

本小説を導くのは、プラハの医者トマーシュとチェコの寒村出身の素朴な女性テレザの出会いと、彼らのたどる運命である。この二人のカップルとは対照的な男女として、トマーシュの元愛人である前衛芸術家のサビナとジュネーヴの大学教授フランツというカップルの動向も描かれる。この二組の（またトマーシュをめぐる三角関係的な緊張も孕んだ）男女の愛の行方が確かにこの小説の筋なのである。とはいえ「恋愛小説として読んでもらいたい」というクンデラの言葉を額面通り受け取ってしまっては、何か本質を取り逃がしているように感じられる。むしろ、男女の愛の行方を追っていく中で浮かび上がってくる人間の実存の赤裸々な真実や、誰しもが逃れられない罠といったものが、クンデラのテクストの喚起するものであるように思われる。

---

[13] 典型的な例が、リヒャルト・シュトラウスのオペラ『ばらの騎士』の最後で、無人になった舞台に、元帥夫人のお小姓である可愛らしい少年が登場して、ゾフィーの落としたハンカチを拾って退場する場面である。

クンデラのこの小説の萌芽が、トマーシュという主人公と「Einmal ist keinmal」というドイツの諺であったことを思い出そう。トマーシュという人物は、プラハの優秀な外科医であり、女性という種の多様性に魅せられ、まだ見ぬ女性の魅力を追求することを人生の最大の楽しみとする人物である。一人の女性に束縛されることを嫌うため、女性と同じ部屋に泊まらないこと、同じベッドで睡眠を取らないことを原則にしている。つまりは徹底した猟色家であり、他人を忖度せず自由を追求することを信条としている人物として描かれる。

トマーシュが外科医という設定であるのは、人体に向けた即物的な（ある意味でアモラルでもある）眼差しをベースに持つ人間のモラルの問題を問いうることがスリリングであると、クンデラが小説家の直感で察知していたためであろう。トマーシュの道徳の彼岸にあるかのような自由奔放さは、男性のアイテムである山高帽を自身のトレードマークとし、何であれ集団というものに嫌悪を覚える前衛芸術家サビナの奔放さと共鳴している。ところが、トマーシュがチェコの寒村で出会ったカフェの給仕係である娘テレザは、トマーシュを追ってプラハに出てきたその日に高熱を出してしまい、トマーシュは原則を侵してテレザを自分の部屋に泊めてしまうことになる。カウフマン監督の映画『存在の耐えられない軽さ』では、このテレザをジュリエット・ビノシュが感動的な垢抜けなさで演じている。

テレザのトマーシュへの思いは一途だが、女性という種への飽くなき好奇心を優先させ、ただ一人の女と向き合おうとはせず、その重さを引き受けようともしないトマーシュに傷つけられる。生来のドン・ファンたるトマーシュだったが、テレザの弱さと重さに、いつしか生き方を大きく変えられていくことになる。テレザは貧しい生まれで、教養ある世界に憧れを持ちつつも学歴はない。プラハの優秀な外科医であるトマーシュの立場に比べれば社会的には弱い存在なのだが、テレザの生には重力に引かれていくような必然性がある。多くを持たず、慎ましく生きる者に宿る逆説的な揺るぎなさである。『存在の耐えられない軽さ』に出てくる繰り返されるフレーズにやはりドイツ語の「Es müss sein!」（かくあらねばならない！）[14]があり、それをトマーシュが口にする訳であるが、トマーシュにとっては、「医師」という職業が「Es müss sein!」であって、それ以外については、偶然に開かれ、「耐えられない軽さ」につきまとわれているの

[14] ベートーヴェンの口癖として引かれている。ベートーヴェンの口癖でもあり、ベートーヴェンの音楽の底流に鳴り響いているものでもあるように思われる。

が、テレザに向かい合うようになるまでのトマーシュの人生だったと言って過言ではない。

強者であるかと見えたトマーシュが、弱さと重さを生の原理としている（それは、彼女自身が意識していることではなく、作家の目により定義されていることである）テレザとの共生を通じて、一つ一つ自らにとって非本質的なものを手放していくことになる。それは、社会的には明らかな退却という形を取っている。『存在の耐えられない軽さ』がアンチ・ビルドゥングス・ロマン[15]であると言われる所以である。

トマーシュにとっての「Es müss sein！」であった医者の職業さえ、遠回しの党批判めいた文書を病院の刊行物に投稿するのを撤回するよう求められ、断固としてトマーシュが拒絶したために失ってしまう。その後トマーシュは窓ガラス清掃人として生計を立てるようになり、ブルーカラーの人間に共通の割り切った仕事との接し方（労働時間が終われば何ら仕事の観念につきまとわれることもない）に心地良ささえ感じるようになる。さらには、トマーシュの女遊びの止まらない大都市プラハでの暮らしを厭ったテレザの望みに応じ、慣れた都会での暮らしも捨て農村に移り住み、トラック運転手となるのである。

トマーシュの元愛人であり、テレザのカメラマンとしての才能を引き出す役割も担い、テレザとの友情を結ぶサビナは、都会の自立した女性であり、高い知性と独立心を持つ。前衛芸術家としての向上心と好奇心の旺盛さも手伝い、サビナはジュネーヴの大学の左翼的知識人で妻子あるフランツに急速に惹かれていく。篤実に研究に没頭しているフランツにとって、創造の世界に関わるサビナは眩しい存在である。サビナが共産主義の教条主義に背を向けてきた過去を持つことも、フランツにとってはミステリアスに感じられた。サビナとは親子ほどの年齢の差もあり、初老にさしかかっているフランツにとっては無論、サビナの若い肉体の魅力も大きな位置を占めている。フランツは、カンボジア侵攻に抗議する知識人たちの大々的なデモ行進に参加する。研究室の孤独に苛まれているフランツにとってデモは連帯心の発露であり、素晴らしい精神の高揚をもたらすものであるが、サビナにとってそれは、繰り返し同じ音楽がけた

---

[15] 主人公がさまざまな経験を経て内面的に成長していく過程を描く小説について、ドイツの思想家ウィルヘルム・デュルタイは「ビルドゥングス・ロマン」と名付けた。デュルタイのこの言葉のモデルとなっているのは、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』であり、ビルドゥングス・ロマン（教養小説と訳される）は、ヨーロッパ、とりわけドイツの近代小説の典型パターンである。クンデラは、ヨーロッパにおけるこうした小説の型やその隆盛を承知した上で、その逆を行っている。

たましく鳴っていた共産主義下の青年キャンプの忌まわしい記憶を蘇らせるものでしかない。デモであれパレードであれ音楽であれ、フランツとサビナにとってのそれぞれの言葉の定義は永遠の平行線を辿る。クンデラは、二組のそれぞれのカップルの間で理解不可能だったことについて「理解されたなかった言葉の辞典」という項目を設けて記すことによって、各人物の実存的な違いを浮き彫りにしている。

小説の規模に比して、比較的登場人物の数は絞り込まれているが、小説のメインとなる二組のカップルは、それぞれの誘引のありよう、それぞれの分かち合えなさの犀利な描写と相まって、20世紀後半の同時代人の肖像として、歴史政治的な背景も織り込み巧みに造形されている。

４．キッチュ批判と動物

本稿において、『存在の耐えられない軽さ』の終章「カレーニンの微笑」に焦点を当てる旨、冒頭に記したが、一節から三節にかけては、その前段であった。クンデラの本小説が、作家として故国をメインの舞台とする最後の作品になっていること、配された登場人物造形の巧みさが特筆すべきであることはこれまでの記述で示してきたところである。終章「カレーニンの微笑」は、クンデラの残した数ある頁の中でも、哀切な幸福感に満たされている。須藤輝彦は「『存在の耐えられない軽さ』という小説の最大の魅力は、第七部「カレーニンの微笑」、つまり最後の数十ページにあると私は思う」[16]と記しているが、とりわけこの最終章に、多くの読者が格別に心揺さぶられるのではなかろうか。

クンデラのこの小説は、二組の男女の愛の行方を追うものとなっているが、トマーシュとテレザが、チェコの田舎の宿屋での歌ったり踊ったりした陽気なパーティーの翌日、自動車事故で命を落とすことは、この小説の終結の遥か手前で、アメリカ在住のトマーシュの息子からサビナが受け取る死亡通知の内容を記す形でさらりと述べられている。小説の終わる前に、読者は主人公の結末を知らされているのだ。この終章は、トマーシュとテレザが間もなく亡くなること、残された時間は長くないことを読者は知った上で読んでいく章となっている。

読者にはトマーシュとテレザの人生の結末がどのようになるかのサスペンス

[16] 須藤輝彦「実存の実験室　ミラン・クンデラと小説の倫理」『れにくさ』５号、現代文芸論研究室 2014年、307頁。

は与えられていない代わりに、二人が間もなく死ぬ運命だとわかっているからこそ、終章の哀切な幸福感にしみじみと浸り切ることができる。また「カレーニンの微笑」と題されたこの終章は、直前の知識人たちの政治的キッチュを誇大なまでに賑々しく描写する第６章「大行進」の直後に来るからこそ、その静けさと澄明さが引き立つ。理想に燃え立つ左翼の知識人たちの陶酔、自由と平等の理念に胸を膨らませる楽観性への嘲り。第６章は、サビナの愛人であるジュネーヴの大学教授のフランツを中心に描かれ、クンデラの政治的シニシズム[17]が爆発している章である。

終章はトマーシュとテレザの飼い犬であるカレーニンを中心に語られる章である。カレーニンの名は、「上の世界に行くこと」に憧れを持っていたテレザが愛読していたトルストイの『アンナ・カレーニナ』に由来する。「カレーニン」は「カレーニナ」の男性形である。犬のカレーニンはメスなのだが、テレザはトマーシュの女性関係に悩んできた経験があるので、犬にさえ女性の名を付けるのを嫌ったのである。

終章では、プラハ、ジュネーヴを経て、農村で暮らすことになったトマーシュとテレザの慎ましく穏やかな牧歌的な生活が描かれる。トマーシュは医者としての栄達の道はあっさりと放棄し、村人たちとの温かな交流のある繰り返される毎日を愛しんでいる。終章では、犬のカレーニンは豚のメフィストと仲良しになる。この田舎の生活は、トマーシュの浮気に振り回されることもない。テレザは初めて安息の思いを得るとともに、弱くて重い自分が、高く駆け上ることもできただろうトマーシュの人生を台無しにしたのではないかとの自責の念に駆られるようにもなる。トマーシュはテレザの自責の念に対し、そんなことはないときっぱりと言う。医者の職を辞したのも、農村で暮らすことにしたのも自分の意思によるのだと。トマーシュという人間、テレザという人間が何に

---

[17] 1998年末、シモーヌ・ヴェイユが啓示を受けたという、ソレム修道院の女子修道会の寮に泊まり、クリスマスのミサに与るという経験をした。そこには、聖書の翻訳についてグループで研究をしているという女性、リールから来たという盲目と弱視の女性の二人連れ、民族音楽好きが高じてグレゴリオ聖歌に興味を持ったというリトアニアの女子大学生が宿泊しており、聖書翻訳研究の方のご子息である建築家がミサ当日に合流された。その建築家からは、谷崎潤一郎の『陰影礼賛』がフランスの建築家や芸術家のバイブルになっていること、そして、建築規制でがんじがらめのフランスの建築家としては、規制の少ない日本の建築家の自由が羨ましいということも伺った。それに続けて、クンデラの話になったが、その際、クンデラの小説について「Cynique！」と一言、しかし、苦笑交じりに、顔全体を歪めるようにして一言放ったのが大変印象的であった。その言葉の放たれた修道院という場所、そこにいたメンバーの顔ぶれも相まっているのだろう、私の記憶の中で、クンデラという作家の手に負えなさ、その批評がこれほど雄弁に語られたことはない。

惹かれ、何に導かれていたか、先行する６つの章の中で、詳細に描かれ、二人の人生の厚みと葛藤を読者は知っているだけに、社会的には明らかな退却と見える選択を是とし、静かな幸福感に満たされている二人に、哀切極まりない感動を覚えるのである。

二人の生活の中心に飼い犬のカレーニンがいる。カレーニンは前足に腫瘍ができてしまい、助からないと判断したトマーシュはカレーニンを安楽死させる決断を下す。カレーニンに苦しんでほしくない、その苦しむ姿を見たくないがために、安楽死を選ぶのである。それは無論苦渋の選択であって、トマーシュとテレザの揺れる思いに、読者もまた大きく揺さぶられる。シニカルな記述の多かったクンデラのこの小説の終章では、一転して小さな犬の生命に焦点が当てられ、その消えかかる生命の光とそれを包みこむトマーシュとテレザの優しさに、読者は涙せずにはいられないのである。

クンデラの『存在の耐えられない軽さ』の一つのモチーフは「キッチュ批判」である。キッチュとは「偽りの鏡に自分を映し出し、その姿にうっとりとする」そのような人間の心性を指している。そのようなキッチュは、個人のレベル、集団のレベル、政治のレベルで見出されるものである。『存在の耐えられない軽さ』はそうしたキッチュを社会や個人のさまざまな場面に読み取り、炙り出すことの連続から成っていると言って良い。それに対し、動物であるカレーニンは生きることのただひたすらな純粋さを体現し、キッチュを免れている存在である。『存在の耐えられない軽さ』の終章が犬のカレーニンを中心に展開するのは、本小説の主要テーマであるキッチュ批判の行き着く果てであったと言える。

５．楽園・牧歌・動物―終わりに代えて

クンデラは、近代という時代を、悲劇というものが成立しなくなった時代であり、また、動物・自然・人間の調和ある「牧歌」の状態を喪失した時代であると捉えている。『存在の耐えられない軽さ』の終章「カレーニンの笑い」は犬の死を「牧歌」が取り巻いていると読める。しかしこの「牧歌」成立のために、トマーシュは外科医の職を擲たなければならなかった。

話は飛ぶが、21世紀の現代にも、原則として電気や電話、自動車を用いない生活スタイルを維持しているアーミッシュという集団がある。19世紀にドイツやスイスからアメリカのペンシルバニア州やカナダのオンタリオ州に移民してきた集団が、移民当時そのままの生活を続けているのである。移動には馬車を使い、農耕牧畜の自給自足生活をしている彼らの生活には、現代人の心の奥底

に響くような、ある種の素朴な美しさが宿っている。しかしその美しさは、個人の自由意志や社会の発展の可能性の排除を背景にしてあることを思うとき、その美しさにほとんど痛覚のようなものを感じる。クンデラの『存在の耐えられない軽さ』の終章には、アーミッシュの生活の美しさに覚える痛覚と似たものがひとはけある。

クンデラは、『存在の耐えられない軽さ』の中で、旧約聖書を引きながら、動物を人間の下位カテゴリーに置くキリスト教的世界観に疑問を呈し、人間を自然の支配者と捉え動物に心はないとしたデカルトの欺瞞をつき、狂気に陥り馬に泣きながら話しかけていたというニーチェに共感を寄せている。

人間中心主義に疑念を呈するクンデラの根本的なスタンスが、この『存在の耐えられない軽さ』の骨格を成している。それは、米ソ二極構造から米中二極構造への変化といった数十年スパンの時代の変化を超えて、強い訴求力をもつテーマである。

クンデラの本小説の執筆開始から約40年を経て、気付かされることがある。それは元々作品の持っていた強いメッセージが、歴史の洗礼によって一層浮き彫りにされたということであると言えるだろう。折りしも本論文校正作業中に、ロシアのウクライナ侵攻の危機が到来した。近代の歩みはまるでなかったかのような野蛮な事態である。ウクライナ危機の背後には中世に遡る因縁の歴史があり、根深い宗教観の葛藤（カトリックかロシア正教か）があることをロシア文学・中世史研究者の三浦清美は指摘している（読売新聞2022年３月１日朝刊６面)。そうしたことを踏まえたとき、ソ連のチェコスロヴァキア侵攻を重要な背景とする『存在の耐えられない軽さ』の理解は更に深まるのではないだろうか。

この小説の終章が動物を中心に展開されることの重要性は疑いを容れない。動物という他者は、人間を映し出すこの上ない鏡であるのだ。

本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究（C)「動物表象の総合的分析―文学文化・哲学の歴史的学際的研究の基盤構築」の助成によるものである。